

今回は、舌がん及び下顎歯肉がんの症状についてそれぞれ画像により詳しく解説されました。いずれのがんも早期発見が重要であり、症状が進行すると言語・味覚などの機能障害を起こすことになる場合があるので、早期の治療が大切との説明がありました。

診断には、CTやMRI、PET-CTなど複数の検査が用いられ、最近では頸部リンパ節への転移を検査する「センチネルリンパ節生検」という検査も行われているようです。

治療は、手術、抗がん剤による治療、放射線治療が主で、口腔がんの治療では、病気を完全に治すことと機能保全との両面が重要であり、そのためまずは放射線と化学療法を併用し（術前治療）、腫瘍をある程度小さくした後、手術で切除する方法を主に採用しているそうです。さらに、治療後の患者さんのQOLを考えたとえば、下あごの骨を切った後は、金属のチタンを使うか、本人の骨、肩胛骨などを使ってあごを再建するなど手術後の再建にも取り組んでおり、がんになる前の状態に戻すことまでを含めてがんの治療と考えていますなどと詳しい説明がありました。

三人目の講演者は、熊本大学大学院生命科学研究部脳神経外科分野教授の倉津純一先生から「脳腫瘍について」という演題でご講演をいただきました。脳腫瘍は、頭蓋内の組織から発生した原発性と、ほかのがんが脳に転移して起きる転移生に分けられ、原発性腫瘍で最も多いのが「髄膜腫」であり、ほとんどが脳と頭蓋骨の間に発生する良性脳腫瘍で、全摘出

することで治癒可能だが、腫瘍が大きくなり脳を圧迫すると、発生部位によってけいれん、運動まひ、言語障害などの症

状を伴うことがあるとの解説がありました。また、脳の神経細胞を守る「グリア細胞」にできる腫瘍の「グリオーマ」は、治りにくく、悪性度により生存期間は平均して、最短で一年、長くても十年ほどという非常に厄介な悪性腫瘍であること、そのほか脳神経に発生する「神経鞘腫（良性腫瘍）やホルモンを分泌する脳下垂体」にできる「下垂体腺腫」は腫瘍が大きくなると近くの視神経が圧迫され、視野が狭くなるなどの症状が出ることで、また、最近ではCTやMRIなどの検査機器が多く病院に設置され、脳の検査を受ける機会が増えたことに伴い、症状がないにもかかわらず、脳腫瘍と診断される「無症候性脳腫瘍」が増えているが、その七割が髄膜種であり、腫瘍は平均して年二ミリ程度しか大きくならないが、無症候性脳腫瘍と診断されても、手術が必要かどうかは医師とよく相談するよう

にという説明がありました。画像を使ってさまざまな脳腫瘍の症状が説明され、全員が真剣な様子で聴講していたのが印象的でした。

約五〇〇人の来場者があり、講演終了後の総合討論では、講演者全員が登壇し、あらかじめ寄せられた質問と会場からの質問に講演者が答える形で行いました。内容を、八月八日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。また、本財団のホームページにも掲載しています。

今後の予定ですが、第四回は平成二十二年十一月十三日に「呼吸器疾患の予防と治療」喘息から肺がんまで、第四回は平成二十三年二月十九日に「消化器のがん」と題してセミナーを行う予定です。

常任理事（事業担当） 遠藤 文夫

生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療関連記事の執筆・監修

平成二十二年四月三日に熊本日日新聞社制作発行の総合生活情報紙「あれんじ」が創刊になりました。タブロイド判と呼ばれる小型の新聞形式の二十二頁もので、毎月第一土曜日と第三土曜日に三十五万部発行され、熊本日日新聞朝刊とともに各家庭に配布されます。

この「あれんじ」各号の見開き二ページ分を肥後医育振興会が担当することにになりました。「あれんじ」紙面の割り付けの長所は、当財団が担当する頁には広告が入らないという点です。昨年度の「まいらいふ」のような執筆医学記事と肥満解消健康食品広告と同じ頁や隣の頁に載る様な欠点が解消できました。A4判の冊子体だった「まいらいふ」に比べると各頁の紙面がかなり広くなり、二頁とはいえ十分な執筆スペースが取れています。

月に二回発行ですので、第一土曜日の分をこれまでの「まいらいふ」に類似させて、健康・医学・医療記事を掲載することにしました。医学部の教授や准教授の方々を中心に執筆をお願いしています。また、「まいらいふ」で人気が高かった小児科医学情報と女性医療従事者の随筆欄を『子育て応援クリニック』と『慈愛の心医心伝心』として継承し、紙面の下三分の一に配置しました。

第三土曜日の分は、医学につながる周辺の学問分野でどのような研究が進んでいるのかを紹介する記事に充てることにしました。熊本大学を中心に地元大学の教授や准教授が、専門の学問分野の内容を分かりやすく紹介する紙上の「科学館」「文学館」と位置づけ、「先端の研究

者をナビゲーターに、熊本の知の世界を観光してみてください」と呼び掛ける意味で『熊遊学ツーリズム』と名付けました。これまでに、超伝導、大気中の微粒子（エアロゾル）、シダ植物と生物多様性、比較文学、確率論、固体科学などを取り上げています。また、精神世界につながるようなものも紹介してみようということ、紙面の下三分の一では、俳句と、熊本祭りを配置しています。このように広範な内容にしているのは、健康・医学・医療という分野は非常に広いすそ野を持っているので、いろいろな学問分野の方たちに力を貸してもらふ必要があると考えているからです。

今年度二十四回分はこのような様式で行きたいと考えています。「まいらいふ」で効果が確認できたように、この事業は、広く県民が正確な健康・医学・医療情報を得ることができると同時に、大学教員にとっては一般の読者に自分の学問領域の学術内容を分かりやすく伝える訓練になります。そしてなによりも医療従事者と一般県民の間に信頼関係を生み出していくことができます。そのことが、健康・医学・医療を担う次の世代を育てる道にもつながります。肥後医育の振興につながっていくと確信できる事業ですが、同時に、情報技術が急速に進む中で、紙媒体による文字文化を維持していくささやかな試みでもあると考えられます。内容は本財団ホームページにも掲載しています。

常任理事（庶務担当） 山本 哲郎

二十二年医学研究会・研修会への助成を行う

平成二十二年度は、熊本大学に在学す